

生きることと学ぶこと

ーキリスト教愛真高等学校での

教師生活を振り返ってー

小田弘平

(一) はじめに

私は島根県にありますキリスト教愛真高等学校を昨年三月に定年退職しました。私は勤務した二十八年間、若い人たちと共に希望を語り合ってきたように思います。今、振り返りますと、この二十八年間は私にとって、本当に感謝すべき恵みのときでありました。生徒と一緒に学ぶことが本当に楽しく、授業することは何にも代えがたい喜びでした。また生徒と一緒に汗を流すことはこの世の最高の喜びを言っても過言ではありません。

感謝すべきことは、この二十八年間は、私自身が人間として練られ、作られていることを日々実感しながら過ごす日々でした。人間形成というのはおこがましく、人間になるとはこういうことだと感じるときでした。

これから教師として働いた日々を振り返りながら、現

在を考えていることをお話しします。

私が勤務したキリスト教愛真高等学校は、島根県江津市の郊外、日本海を見下ろす山の中腹にある全寮制普通科、男女共学、現在在校生五十名、教職員も同じ構内に居住する、小さな学校です。

この学校は伝道者高橋三郎が聖書に基づく人間教育をする学校を設立しようと提唱し、多くの方の協力を得て一九八八年に開校しました。高等学校という人生の基礎工事をする年代に、学問を真剣に学ぶだけでなく、人は何のために生きるのか、生きるとはどのような意味があるのかを考えることを教育の根幹に据える学校です。学校の教育目標は次の通りです。

「豊かな知性と確固たる良心を合わせ備えた、責任の主体たる独立人を育成することを目標に、少人数・全寮制の環境において聖書に基づく全人教育を行う。」

このような教育目標を掲げる学校で、生徒たちはどのような日々を送るのでしょうか。

生徒たちは、真剣に教科学習に取り組み、アジアの隣人と手を握るための平和学習や、自分たちの生活を整えるための作業・調理の他、共に生きるためのルールを考え、具体的な問題について時間をかけて話し合います。こうして愛真は彼らにとって第二の故郷と呼ぶべき存在になっ  
ていきます。

そのような高校生活をしながら、「人は何のために生きるか」を自分に問いかけます。

これは人間が追求すべき根本的な問いかけです。もちろん、高等学校の三年間で答えが出るはずはありません。生涯をかけて真の人間として成長しつつ探求するものです。自己探求への旅立ちを始めるのです。教育は答えを示すことではなく、学びの主体者である生徒が自らに問いかけることであると思います。

(二) 人は何のために生きるのか

「人は何のために生きるのか」という命題は実は、自身の少年時代からの問いかけでした。学校での生徒への問いかけと、私個人の問いかけが一致していることは、不思議としか思えないのです。

私には生涯の恩師があります。藤原庵先生という方です。一九五〇年、広島県の山間部の町にある小学校に入学したときの校長先生です。朝礼で話された藤原先生の言葉で、今も忘れることができません。

小学校の三年生だったと思います。

「皆、始めあり。よく終りあるもの少なし」という言葉です。誰でも志を抱いて事を始めるが最後までやり遂げる人は少ないという意味です。児童全員が口を揃えて復唱する声如山からこだまになって響いてきたことを覚えています。この言葉の真意は大人になるにつれ、本当にそうだと納得できました。

また、これも小学校二年生頃のことです。当時、子どもたちの間でくず鉄集めが流行っていたのです。私も、空き缶など、くず鉄などを集めて町にある回収業者に持っていくと、五円か、十円ぐらいの小遣いを稼ぐことができたので、学校から帰るとくず鉄集めに夢中になっていました。ある日の朝礼で藤原先生が次のように話されたのです。

「お前たちが放課後、夢中になって集めている鉄屑が

何になっているか知っているか。隣の国で行われている朝鮮戦争で使われる鉄砲の弾、爆弾になっているのだ。」

その時、運動場に並んでいる私たちに一瞬恐れがみなぎり、緊張感で覆われたことを覚えています。自分たちが集めている鉄屑が戦争に使われることになる知り、私は大きな衝撃を受けました。もちろん、小遣い稼ぎのために屑鉄集めをすることはやめました。

さらに、わたしが高等学校に入学した夏休みに私は藤原先生を自宅に訪ねたのです。そのとき、藤原先生はわたしに次のように尋ねられたのです。

「お前はこれからどのように生きるつもりか。」

この質問に対して、私は 咄嗟<sup>とっさ</sup> のことでしたが、開け放たれた二階の座敷から、川向うの山々の木々を見ながら、

「私は死ぬ時になって、自分は一本の木を植えることができたと言ふことができれば、それでよいです」と答えました。

すると藤原先生は頷きながら、「私もそう思う」と応答

されたのです。藤原先生は師範学校の卒業生ではなく、苦勞して検定試験を受けて学校の先生になられた方でした。短い藤原先生の言葉には、ご自分の生涯があるように思いました。

それ以来、「自分はどのように生きるか、何のために生きるか」を真剣に考えようになりました。これが、私が入間と生きようとする出発点であり、私の人間形成の原点です。

その後、私は本屋で、手にした内村鑑三の『後世への最大遺物』（岩波文庫）のページを開くと、そこには天文学者ハーシェルが二十歳ばかりの時に友人に語った言葉がありました。

「わが愛する友よ、われわれが死ぬときには、われわれが生まれたときより世の中を少しなりともよくして往こうではないか。」

私は本当に驚きました。自分がかねてから考えていることと、同じ考えをもって生きた人が実際に存在していたのです。しかも私自身がどのように生きるかを模索していた時に、この言葉に出会いました。今思っても不思議です。自分の人生の先輩を発見したのです。自分と同

じように生きる目的を探し求めていた人と今、自分は出会ったという感動を忘れることができません。

愛真高等学校の教師になって、生徒と学び、人生について語るようになり、いかに生きるかを考える時、私は藤原庵先生との出会いを原点として考えます。藤原先生は質素な詰め襟の国民服を年中着て、町から離れた自宅から自転車通勤しておられる姿を今も目に浮かべることができます。藤原先生は、父を戦争で失い、母と二人で生活している私の将来を考え、中学三年生のときには、母に私を高校にやれと言われたのでした。当時、広島県の高校進学率は五十パーセントをやっと超えるか、超えないかという時代です。同級生が中学校を卒業すると働くのに、自分が高校に進むことに引け目を感じたことを覚えていきます。

この経験から、私は「人は何のために生きるか」という問いは「出会い」の中で与えられ、その答えは人格を通して教えられるものであることを知りました。

藤原先生はその問いを「私はこう思う」という答えでなく、「お前はどうか考えるか」という問いで生きる意味を

考えさせようとされた。このことは私にとって本当に良かったと思います。このことから私はこう考えます。

・生きる意味、あるいは生きる目的というものは人から教えられるものではなく、自分で模索し、探求すべきものである。

・この問いは人間が生涯をかけて追求すべきものであり、他者との出会いによって答えが与えられる。

愛真が「人はなんのために生きるのか」という命題を生徒に求めているのはよかったと思います。

### (三) 良心を育てる

ところで若き日に考える、あるいは育てるべきものに「良心」というものがあります。高校生という年代は正義感に溢れ、何が正しいかを真剣に考える力を持っています。

愛真で国語の授業で学習したもののの中に、内村鑑三の『代表的日本人』があります。

その中に、次のような話が紹介されています。

江戸時代のことです。主君の命で、ひとりの侍が数百両の金を託されて帰る途中、財布を雇った馬の鞍に結びつけておいた。宿に着き、鞍に付けた金を忘れたまま、馬子と一緒にその馬を返してしまった。その馬子を探そうにも方法はない。彼は遺書をしたため、最期を迎える決意をかためていた。ところがその馬子が真夜中、財布を届けてくれた。侍が謝礼を渡そうとしても受け取らない。僅か二百文だけをやっと受け取った。侍はこのご時世にもこのような正直な人物がいたことに驚く。

馬子は自分の良心に従ったのです。

良心に従うことについて思い出すことがあります。藤原庵先生のことです。

小学校の何年生のときか、分からないのですが、突然、進駐軍（日本を占領していた連合軍でアメリカ軍が主力）がジープを先頭にして軍用トラック二、三台が小学校に来たのです。友達が知らせてくれたので、小学校に走って行ってみると、大きな体格をした兵士たちが、校庭にカーキ色のテントを張り、食事の準備をしているところでした。軍用トラックには小銃が何丁も縦に並べて架け

てあり、わたしはあの小銃で日本軍と戦争をしたのかと思っ  
て息を呑む思いで見えていました。ジープのアンテナが紐で斜め後方に曲げて結んであったのを覚えて  
います。小学校に来た進駐軍がその夜、学校に泊まるのです。学校に泊まるといつても、教室に泊まったのか、それとも運動場に張ったテントに泊まったのか分かりません。

当時、日本は戦争に負け、マッカーサーの率いる連合軍の総司令部 GHO が日本の政治も社会も支配していた時代です。突然、山間の田舎の町に来た進駐軍が、学校に泊まりたいというのです。当時、小学校のわたしのクラス四十八人中、父親が戦死した子どもが私を含めて少なくとも五人はいたと思います。そうした子どもがいる小学校にアメリカ軍の兵士を泊めることは教育者として許されることなのか。

藤原先生は自分の良心に従おうとされ、苦慮されたに違いない。そもそも、学校に宿泊するという進駐軍の地方巡察計画自体が間違っているのです。私は、藤原先生は敗戦国の国民でありながらも、ひとりの教育者として、次のように答えられただろうと想像しています。

「あなたたちは戦争をする兵士である。ここは子ども

たちが命はかけがえのないものであることを学ぶ学校である。それゆえ教室に兵士である、あなたたちを泊めるわけにはいかない」と。

そのため、私は、進駐軍は校庭のテントに泊まったのだらうと思うのです。

良心に従い、判断し行動する、これができるか否かで、その人が判断されます。神の前に立つか、それとも人間の側に立つかが問われるのです。私たちは生きている限り、事柄の大小は別にして、始終このような判断が求められています。良心とはとっさに判断するものです。

先ほど紹介した『代表的日本人』の文章の中に「このご時世にもこのような正直な人物がいた」という言葉がありました。その時代にも自分さえ良ければいい、良心など問題ではないと考える人が多かったのでしょうか。

先日、三浦綾子原作の映画『母』を観ました。小林多喜二の母の生涯を描いた作品です。昭和の厳しい軍国主義の時代です。人々は自分たちが生きていく社会は大変な時代であると考え、世の流れに逆らわないで生きる人

が多かったのでしょうか。しかし、そのような「このご時世に」もかかわらず、良心をもって生き抜いた青年、小林多喜二と、彼をどこまでも愛し抜ぬいた母がいたことを知り、たいへん励まされました。

現代はどうでしょうか。人間にはお金よりもっと大切なものがあることは誰もが知りながら、富や自分の地位を守るためには、節操を守ることとはしないと平然と言いつつ、異常な社会です。人間としての誇りを捨てることに何の躊躇ためらいも感じないのででしょうか。

しかし歴史を顧みると、人間が生きている時代というもの、いつの時代も「このご時世に」と呼ばれる時代なのです。これが現実です。しかし、「このご時世に」良心をもって生きることが人間にとっても、社会にとっても、地球にとっても大切なことです。

私は考えます。人間より偉大なものを見上げる心、本当の生き方を求める魂、それを育むことが教育の根底に必要です。人は生まれたままでは人間にはならない。永

遠なるものがこの世界には存在していることを示し、それに目を開かせるが教育だと思えます。そのようにして良心というものは育まれるのではないかと思えます。

わたしはこのことは人格を通してなされるものであることを私は学びました。藤原先生はどこか違うぞ、それは何だろるかと感じさせるものが人格であろうかと思えます。

新約聖書の使徒言行録二三章に、パウロが異邦人に宣教活動をしていたところ、彼の活動に反感をもつユダヤ人に訴えられ、最高法院に引き出される場面が記録されています。

「そこで、パウロは最高法院の議員たちを見つめて言った。『兄弟たち、わたしは今日に至るまで、あくまで良心に従って神の前に生きてきました。』すると、大祭司アナニヤは、パウロの近くに立っているものたちに、彼の口を打つように命じた。」（1節から2節）

人間には言うべきことは、口が裂けても言わなければならぬときがあります。神の前に立つとは自分の良心に従うことです。

ところでこのような良心はどうして、パウロに与えられ、また藤原先生に与えられ、そして私たちにも与えられているのでしょうか。

創世記一章27節に「神はご自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された」とあります。「神にかたどって」創造されたことを強調しています。

しかも二章には「主なる神は土の塵で人を形づくり、その鼻に生命の息を吹き入れられた」（2節）とあります。

このことを考えると、人間に与えられている良心は、神の意志を汲む心、つまり本当の人間として生きる原動力として神から与えられたものであると思います。しかし、その良心は外からは見えず、「内なる良心」という表現が適切です。人が一生をかけて自らの責任で、自分の心の中で育てていくべきものだからです。神への信頼という服を纏ったわたしたちの内部に「内なる良心」として存在するものであるとわたしは思います。

私たちの日々は「この瞬間、自分はどうか判断するか」の連続です。

私は現在住んでいる所に越してきて一年になりましたが、四月に町内の自治会総会に出席しました。配られた予算案に目を通して見ると、神社のお祭り費用が予算に計上されていました。町内に住んでいる人全員がその神社の氏子ではないのに、住民の自治会から支出することはおかしいと思い、私は異議を唱え、自治会活動と神社活動は分離すべきではないかと主張しました。そうすると、反対意見もあれば、目くじらを立てることほどのことではない、など様々な意見がありました。中には政教分離の問題ゆえ慎重にすべきだという意見もありました。結局、問題提起したことで、総会は終わりました。隣近所の人の前で、自分の信条から発言することは勇気が要ることでした。

新約聖書のヘブライ人への手紙一三章「<sup>8</sup>節に次のような言葉があります。

「私たちのために祈ってください。私たちは明らかなる良心を持っていると確信しており、すべてのことにおいて、立派に振る舞いたいと思っています。」  
ヘブライ人への手紙の著者は「このご時世に」も、キ

リストの僕として、立派に生きたいと願っていました。しかし、自分は弱い人間であり、自分だけの力ではこの闘いを貫くことはできない。そのために神の力と友の祈りによって支えていただくことが必要であることを知っていたのです。

彼は「私は、決してあなたから離れず、決してあなたを置き去りにしない」(5節)と言われる神の言葉が唯一の拠り所だったので。四面楚歌という孤独な状況の中で、彼はこの手紙を書いたのでしょう。聖書を読むとはそのような状況を想像し、その中に自分を置いて考えることであると思います。

足尾鉍毒事件で闘った田中正造は「聖書は読むべきものでなく、実行するものだ」と書いています。田中正造もおそらく、「私は、決してあなたから離れず、決してあなたを置き去りにしない」という神の力にのみ、より頼んでいたことと思います。

藤原先生はクリスチャンではありません。しかし人間というものは偉大な力、意志が働いて造られたことは承認されると思います。この聖書の人間観については、ク



リスチャンでない人も、受け容れることができるものだと思います。

私がこのように考えるのは理由があるのです。

愛真に入学する生徒の中にはキリスト教の信仰を持たない、聖書を読んだことがないという生徒が多数います。しかし、人間は神、あるいは偉大な力によって創られた被造物であるということは納得する生徒が多いのです。

そういう生徒も、人間には良心があることを認めています。それゆえ私は高校生に聖書について話す出発点はここから始めるのがよいと考えるようになりました。

とくに若い人にとって、この良心の問題は切実です。

愛真で問題が起きた時、生徒たちは熱心に話し合いますが、最後にはお互いの良心に信頼しようという結論になることが実に多い。とくに寮生活ではそうでした。

私は寮監の職を二一年間兼ねていましたので、そういう経験を何度もしました。それは寮監としての自分の良心が問われるときでした。ときには寮監の職務から逃げ出したくなる時もありました。そのとき私が思ったことは、

生徒と共にこの問題に今、立ち向かっている、この瞬間は、生徒にとっても教師の私にも、この時を逃してはもう来ないということです。この問題をどう判断するか、今が自分の生涯にとって最も大切な瞬間であると強く感じるのです。しかしそう考えながらも、生徒をどこまでも信頼しようとする自分と、信頼できない、情けない自分がいるのです。そのような時、祈ろうとしても、言葉にならないのです。

しかし、人は皆、良心を神さまから頂いている、そう考えると立ち上がる力を与えられました。

人間が創造されたときから既に、人間には良心という種を撒かれていたと思います。その良心の種を人間は生きながら、出会いやあるいは試練の中で教えられ、育てていくのだらうと思います。しかし、ときには自分は良心に従うことができず、誘惑に負けてしまうこともあります。そのとき、自分の良心は傷つきます。

愛真の現代文の授業で扱った教材である、『荒れ野の四十年』（ヴァイツェッカー）の中に、駅にいてユダヤ人を強制収容所に移送する列車の通過を目撃しても、身の

安全を守るため、自分はそれを見なかった、あるいはそれに気づかなかつたと言う人がいた、というくだりがあります。

この場合、良心に従って生きようとすれば、自分の死を招くことが分かっています。良心に従って生きることは大変な覚悟が求められるのです。神により頼んで生きて、はじめて自分の良心に従って生きることができるとです。

私は学校というところは自分の内なる良心を育てるところだと思えます。否と言うべきときは、はっきり「ノー」という言う人間を育てるのです。自分にも「ノー」と言う人間を育てるのです。しかし、これは学校という場所だけでなく、人間は生涯を通じて教えられ、神さまの助けを受けて、育てていくものであると思えます。

良心を育てるとは人間の品性を育てることです。内村鑑三は次のように言っています。

「神に逆らいたればとて、その刑罰として直ちに病に罹り、貧にせまり、または社会の地位を失うものではな

い。否、多くの場合においては身の境遇の改善は神を捨てさりし結果として来るものである。神に逆らひし

観面てきめんの刑罰は品性の墮落である。すなわち聖きことと高きことが見えなくなつて卑しきことと低きことを追求するようになることである。しかしながらこれ最も恐るべき刑罰であつて、人にとり実はこれよりも思い刑罰はないのである。」

良心も品性と似ていると思えます。まあこれくらいはいいと軽い気持ちでことを収めていると、自分が、気がつかない内に、良心が鈍感になつていることがあります。良心は自分の責任で、育てるもので品性の根幹であると思えます。良心は最後の審判の時、自分が神の前に立つことを意識して、育てていくものです。内なる良心をもつて生涯を生き抜きたく思うのです。

人間の歴史は抑圧に対する良心の闘いだつたことを歴史は教えています。

(四)「学ぶとはどういうことか」

学校とは何かと生徒に尋ねると、勉強するところだとほとんどの生徒が答えます。ではなぜ勉強するのかとさらに問うと、勉強しないと社会に出て困るから、進学する時不利になるから、などと答えることが多いのです。

現代文の授業で丸山真男の『「である」ことと「する」こと』という文章を学習したときのことです。これは『日本の思想』（岩波新書）に収まられている文章ですが、実に優れた教材でした。二八年間、国語の授業をして、あれほど、生徒が熱心に学び、感動し、考えたことはなかったと言っても過言ではありません。

『「である」ことと「する」こと』という文章は次のように展開します。

近代になって伝統的な身分が崩壊するにつれ、近代精神は「である」論理から「する」論理へと重点を移動した。そのため学問の分野でも、論文の内容よりも、論文をどれだけ書いたかで測られる傾向がある。

そして、本当の意味での「教養」とは、「自分について、知ること、自分と社会との関係や自然との関係について、

自覚を持つこと」であると定義します。そして教養とは、人間が「する」ことに軸を置くのではなく、教養は彼が「ある」ところに、存在するところに軸を置いている。それゆえ教養はそれ自体に価値がある。学問は文化的な精神活動であり、文化的創造は人間としての価値の蓄積をしているのだ。

教養とは人間が人間である証しであるというのでしよう。

このことを読み込んだ生徒たちは三つのことに気がつきました。

- ・学校で学ぶことの目的は、自分について知ること、自分と社会、自然との関係について自覚を持つためである。高等学校で学ぶ意味はここにあると気づいたので。

- ・日々の学びは人間としての価値の蓄積をしていることに他ならない。

- ・さらに近代精神の流れから言えば、学校の存在意味 *to do* よりも *to be* にある。

このことを「発見」した生徒たちは改めて愛真の教育を見直したのです。

さらにギリシヤの学問も余暇を用いて発達したことを考えると、高校生時代の持つ意味がいかに大きなものであり、学びが人間形成の基礎をなしていることを自覚したのです。

「自分たちは現在、人間としての価値の蓄積をしているのだ。教室での学び、作業、寮生活など愛真での学びの意味を、発見したのだ、しかも授業の中で気がついたのだ。」

この感動はよほど嬉しかったようで、授業が終わっても時々、生徒の口から「価値の蓄積」という言葉が出てくるのです。この時の生徒たちの表情を忘れることができません。私自身、その夜は嬉しくて眠るのが惜しいと思ったことを覚えています。

学校というところは、このように人間の「価値を蓄積」する場所です。文学、芸術、言葉、数学、科学、哲学、歴史など、実生活には直接役に立たないと思われる学び

をします。理性で考え判断し、人間としての感性や情緒、

感動で心を満たし、そして他者と共に生きる喜びなどを味わうのです。社会に出てすぐに役に立つ知識や技術などと最も遠いと思われる学びですが、実は人間にとって重要な意味をもっているのです。それが人間存在に深みを与え、人間としての価値を蓄積するのです。

先ほど紹介した『代表的日本人』の中で、内村鑑三も学校について、次のように言っています。

「学校は知的修練の売り場としてあるのではなく、真の人間になるためにある。また学校では僅かな歳月の間に知識を詰め込んでほならない。」

学校はやはり人間として「価値の蓄積」をする場なのです。

生存競争に打ち勝つための、知識獲得偏重の学びが、本当に人間としての英知を切り開くものになるだろうかという疑問を私は持ちます。

現代の学校教育の問題は、学ぶことと生活、生きることが分離していることにあります。学ぶことにより人間として「価値の蓄積」をしているのです。そのように考えると、授業の内容と人間としての生き方とどのように

関わっているのかを、もう一度吟味する必要があります。

高等学校での学習には、本当の人間になるという大きな目的があるのだということができません。本当の人間とは、神から創造された被造物として、成長するものです。

学校でもっと学んで欲しいと思っています。しかし、学び方自体に問題があるのです。限られた時間内に多くの問題をこなすために受験技術が必要とされ、いつの間にか、目に見える成果で人間を測る愚に陥ってしまっています。けれどもそうした知識はすぐ忘れてしまいます。

高等学校で学ぶことは人類が発見した英知です。どのような状況の中で、この英知を発見したか、その状況の中に自分の身を置くと何が見えてくるかを考えるのです。そこまで考えると、自分はこれで良いのかと自分を吟味せざるを得ない。

たとえば教科書には水俣病についての短い記述がありますが、この言葉を知り覚えるだけでは自分の教養になりません。水俣病と自分はどうに関わっていることになるのか、このような公害を産んだ社会や生き方などのように変えていくかという自覚まで至って本当に学

んだことになると思います。

そこまで考えると、学ぶことによって、今までの自身が変わらざるを得なくなる。自分を作っている枠自体が崩れ、新しい自分に変えられる。

学ぶことによって人が真の人間になるのだということとを私自身、授業を通して学びました。授業しながら自分がこれまで立っていた立ち位置まで壊され、新しい発見と感動が与えられて、未知の世界を知ったという喜びを味わうことができました。ああそうだったのかと、真理を知った感動に満たされることが何度もありました。そうすると、感受性が豊かになり、未知のことに對して知的好奇心が旺盛になります。言い換えれば、真理に對して謙遜になります。

授業しながら、教材準備の段階では気が付かなかったことに目が開かれることも何度もありました。そこにはもはや生徒と教師という関係はなく、真理探求の前に共に立っていると何度も思わされました。私は授業が大好きになりました。今でもそうです。教師という職業はわたしにとって天職でした。仕事をしながら、生徒に育て

られました。

(六) 働くこと

愛真では「作業」という時間があります。私は「水田・山林班」を担当しましたが、教壇に立つ姿より、作業服を着ている姿のほうが似合っていると生徒が言ってくれます。

田んぼに入って、田植えの準備をし、田植えが終わると田の草取りをします。除草剤などを使わず、手で草を取りますが、腰は痛くなり、ヒルに噛まれる。汗が顔から流れるが、手に泥が付いているので、汗を拭くこともできない辛い作業です。

作業時間が過ぎても、予定したところまで草は取らないと次回の作業がもっと大変になるからと、生徒も黙々と草を取ります。草取りを手抜きすれば、次回の作業がもっと大変になることを皆、体験的にも知っています。また収穫量に響くことが生徒にも分かるのです。手を抜かないで、自分の担当場所は責任をもってやり遂げるのです。働くとは責任を担うことであると、汗をかきながら体で学ぶのです。

また山に入って植林や間伐などの作業もします。すべて大変な仕事ですが生徒は誰一人文句を言わないで懸命に働きます。泥だらけの汚い仕事でも喜んで働くのです。

なぜ彼らはよく働くのか。彼らは自分の仕事に誇りを持っていて。仕事とは心でするものであることに気づくのです。ですから自分の仕事に汗を流すことに喜びを感じているのです。働くことによって人間が人間になるのです。他の作業もそうです。生徒の食べる毎日の食事も生徒が担当の先生の指導のもとに作ります。

愛真を卒業した生徒はよく働きます。こんな話があります。三・一一の救援物資の発送作業に集まったボランティア集団の中で、ひとときわよく働く学生たちがいたので、責任者が「君はどこの学校を卒業したのか」と尋ねると、彼らは愛真の卒業生だと答えた。その責任者の方はこのことを知らせようと、愛真に電話をしてこられたことがありました。電話を受けた私は、卒業生が社会の中で、このように用いられていることを知って嬉しく思いました。自分の責任を黙々と果たす卒業生を送り出していることは学校にとっても教師にとって嬉しいことです。

す。卒業生が愛真の存在を世の中に伝えていくのです。

内村鑑三の「読むべきものは聖書、学ぶべきものは天然、為すべきものは労働」という言葉があります。人が嫌がるような仕事を進んでする人間を育てることが求められているのです。やはり内村鑑三の『後世への最大遺物』の中に、アメリカの女学校の校長であるメリー・ライオンが生徒たちに語った言葉が紹介されています。

「他の人の行くことを嫌うところへ行け。

他の人の嫌がることをなせ。」

この言葉を私は何度も何度も愛真の生徒に話しました。卒業生はこの言葉を心に刻んでいると思います。喜んで汗を流して働く人間、責任を担う人間を育てることが教育の中心課題であると思います。

#### (七) 歴史を学ぶ

愛真では歴史から学ぶことを大切にしています。教科の枠を超えて、人間の生き方を検証し、より良い生き方をするために歴史を学ぶのです。

私はかつてドイツの文化都市ワイマールの近郊にあるブーベンバルト強制収容所を見学したことがあります。広大な敷地には当時の建物が保存され、多数のボランティアの案内者が詳しく説明してくれます。死体を焼いた焼却炉がある建物に入ると、十名ぐらいのドイツの高校生が教師と焼却炉の前で議論をしています。現場に出かけ、現場の空気を感じながら、祖父たちの犯した犯罪を自分たちはどのように受け止め、このような過去の歴史を背負った自分たちは、これからどのように生きるべきかを真剣に話し合っていたのです。

彼らは歴史を直視し、歴史から学ぶうとしているのです。

『荒れ野の四十年』（ヴァイツェッカー）には次のような文があります。

「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです。」

なぜ歴史を学ぶのか。人間は過ちを繰り返す動物です。

神さまが創られた被造物にもかかわらず、平気で悪を行ってききました。旧約聖書は神の言葉に逆らってきた歴史が羅列されています。「人間は往々にして大切な人間の記憶を僅か四十年しか心に刻んでおくことができなかつた。」それゆえ、歴史の真実を冷静かつ公平に見つめようと言うのです。こういう言葉があります。

「正義においては内面の規範に従おう。」

内面の規範、つまり良心に基づいて行動する人間になろうというのです。

これは私たち日本人にも向けられている言葉です。私は韓国研修旅行で毎年のように、韓国を訪問してきました。

そのとき韓国の方がよく言われるのです。過去のごときは十字架によって赦されたものとして、これからは手を携えて共に歩みましょうと。しかし、これは韓国の方から言うことができる言葉であって、私たち日本人から言うべきことではないのです。アジアの人々は日本が犯した事実を今も子どもたちに語り続けておられます。アジアの人々は、日本人はこれから人間としてどのよう

生きるのだろうかと注目しています。しかし、肝心の日本人は過去の事実を忘れ去ろうとしているのです。それどころか、日本人として、この事実を知らない人が急増しています。歴史の過ちを知らないことは人間として恥ずべきことです。私たちはどんなに辛いことであっても、過去の誤った支配の事実を記憶し、語り続けていかななくてはならないのです。歴史の事実を忘れないことが人間としての証なのです。

今私たち日本人は世界の歴史の中で問われています。私たちが歴史に記録される生き方を選択するのか、それとも歴史から抹消される歩みをするのかと。私たちは大きな岐路（分かれ道）に立っています。負の歴史を心に刻んでおくことが人間としての生きる証であると考えます。私たちに必要なものは歴史を正視する勇氣です。人間の行為の中で、最も高貴なものは、自己の罪を誠実に認め、誠心誠意、謝罪することです。

聖書に次のような言葉があります。  
「命の書に名を記される」（フィリピの信徒への手紙 四章3節）。

私たちは「命の書」の名が記される生き方をしたい。



神の審判に堪え得る生き方をしたい。これこそ、内村鑑三の言う「後世への最大遺物」です。

(八) 終りに

旧約聖書の詩編八篇にはこうあります。

「あなたの天を、あなたの指の業をわたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。そのあなたが神心に留めてくださるとは 人間は何者なのでしょう。人の子は何者なのでしょう。あなたが顧みてくださるとは。神に僅かに劣るものとして人を造り、」(4節から6節前半)

人は神に僅かに劣るものとして創られたのです。それほどまで神は人を愛しておられる。

イザヤ書四六章で「わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す」(4節)と神は言われた後に次のように言われている

「わたしは語ったことを必ず実現させ、形づくったことを必ず完成させる。」(二節)

神は人間を「形づくったことを必ず完成させる」と言われるのです。これはすごいことです。ここにわたしは

希望を抱きます。わたしたち人間は、神の目から見れば、まだまだ未完成であり、今なお「形づくる」営みが続いている。このことは人間の目には見えないことだけれど、いつの日か、神は完成されるでしょう。その証拠に、神は御子イエス・キリストを十字架にかけて人間の罪を贖おうとされている。

そのような神の御業の中で、教育の役割を考えてみると、教育とは、人間が神に支えられながら、より人間らしくなろうとする主体的な営みと行うことができます。

私にとって生きるとは学び続けることです。学ぶことよって私は変えられます。生きることは、神様の前に立つことであり、学ぶことよって私自身が人間らしい人間に作り変えられることだと思います。具体的に、実に多くの方との出会いがありました。とくにキリスト教愛真高等学校という場で、私が出会った生徒や教職員、また学校を通して、出会った多くの方から、教えられ、ひとりの人間として育てられてきたことを感謝します。今日、このような機会が与えられたことを本当に嬉しく感謝しています。

(六月十日、デンマーク牧場の「まきばの家」にて  
お話したものを、整理し加筆しました)